

【研究報告】

ブルキナファソにおける子ども対象の
マラリア予防啓発キャンプの効果と今後の課題

高橋 亮* 松野 瑠衣** 菅原 友美*** 高橋 良枝***
森 りさ*** 熊崎未紗子*** 坪井 保徳***

【要 旨】

ブルキナファソ国政府はマラリア対策を重点課題とし、様々な施策と啓発活動に取り組んでいる。特に5歳未満の乳幼児死亡率が非常に高い同国では、子どもに対するマラリア予防が重要視されている。今回、独立行政法人国際協力機構（JICA）において、同国の各地域を巡回する子ども対象の「マラリア予防啓発子どもキャンプ」が企画され、青年海外協力隊隊員と同国現地スタッフによって実行された。本研究では、その効果および改善点を検証し今後の同国におけるマラリア啓発活動の援助を提供するための基礎的研究に資することを目的とした。研究方法は、本キャンプで活動した現地の担当者に、「良かった点」と「改善点」について自由回答を求めた質問紙調査を行った。良かった点としては【教育効果】と【体験した内容】のカテゴリーに属する回答が最も多く、次いで【協力体制】【地域貢献】という順で回答が得られた。一方、改善点については、【体験した内容】のカテゴリーが最も多く、次いで【経済的問題】【日本人参加者の態度・能力】【キャンプの生活上の問題】【キャンプの対象者の選定】という順で回答が得られた。今後は、より現地に根付いた効果的且つ継続される活動となるように、現地のニーズに合ったプログラムや対象者の選定、さらなる経済的援助等を検討する必要があることが示唆された。

【キーワード】 ブルキナファソ、マラリア、子どもキャンプ、独立行政法人国際協力機構（JICA）

I. はじめに

ブルキナファソ国は、西アフリカに位置する内陸国で資源に乏しく、主な産業は農業・牧畜で人口は約1,520万人の国である。2008年における1人あたりの国民総所得（GNI）は480米ドルと低く最貧国のひとつとして数えられている¹⁾。経済以外の多くの指標も低水準であり、国連開発計画（UNDP）による人間開発指数は世界179国中173位²⁾、保健指標では5歳未満児死亡率（出生1000人対）が204と国連児童基金（UNICEF）による5歳未満児死亡率の世界10位に位置する³⁾。1990年の5歳未満児死亡率が206であることから、現在に至ってもほとんど改善されていない状況である³⁾。同様に、平均寿命も52歳と低く、1990年の平均寿命が50歳であることから、わずかな伸びに止まっており依然低い水準である。

疾病構造についてしてみると、診察数上位の疾患で罹患数の第1位はマラリア（重症を含む）であり年間診察数が約300万件、第1次医療施設における全診察の約41%を占めている⁴⁾。また、院内死亡の原疾患においてもマラリアが第1位であり、全体の44.6%を占めている⁴⁾。マラリアが大きな問題となっている開発途上国の多くは、ブルキナファソをはじめとするアフリカの貧国であり⁵⁾、これは衛生状態の悪化や貧困、教育水準の低さなど、様々な要素が複合的に関与して罹患率を高めているためと考えられる。中でも、西アフリカに位置するブルキナファソは、マラリア流行地域であるにも関わらず、住民の感染予防意識が低くマラリアに罹患する患者が多いことが問題となっている⁶⁾。地域的特性だけでなく、同国の医療システムにおいても、人材面では医療従事者不足とその質が課題とされており、施設面では医療施設自体が不足していることに加え、地域

* 日本赤十字北海道看護大学

** 独立行政法人国際協力機構（JICA）ブルキナファソ事務所

*** 青年海外協力隊

格差が大きいため特に地方で問題が深刻化している⁴⁾。

このような状況を踏まえて、同国政府はマラリア対策を重点課題として位置づけ、様々な施策と啓発活動に取り組んでいる。特に、5歳未満の乳幼児死亡率が非常に高い同国では、子どもに対するマラリア予防が重要視されている。今回、独立行政法人国際協力機構（以降、JICAとする）ブルキナファソ事務所において、現在派遣中の青年海外協力隊長期隊員と短期隊員により同国の各地域を巡回する子ども対象の「マラリア予防啓発子どもキャンプ」が企画され、筆者も短期派遣隊員として同キャンプに参加することとなった。その活動の効果および課題を現

地キャンプ実施担当者の視点から検証し、今後の同国における効果的なマラリア予防啓発活動への支援に資することを本研究の目的とした。同国において日本人により企画・実施されたマラリア予防啓発活動の評価を行うことで、今後のより良い活動への布石としたい。

II. 「マラリア予防啓発子どもキャンプ」が企画された経緯と活動概要

ブルキナファソ国政府は「国家保健医療開発計画（Plan National de Development Sanitaire:PNDS）2001-

表1 マラリア予防啓発子どもキャンプのプログラム内容

開催地及び参加者背景	主な活動内容	
	マラリアに関する内容	その他の内容
Hounde 9～12歳 (30人) <4日間>	マラリア講座	開会式
	マラリアの演劇準備および発表	映画鑑賞（日本のアニメ）
	マラリアに関するお絵かき	記念植樹
	マラリアのビデオ鑑賞	日本文化紹介（日本の概況説明、書道体験、浴衣試着、折り紙等）
	蚊帳講座	歯みがき講座
	医療施設訪問	ラジオ体操
	保健関係機関訪問	閉会式・参加証授与
Tenkodogo 7～12歳 (40人) <4日間>	マラリア講座	開会式
	マラリアの演劇準備および発表	記念植樹
	マラリアに関するお絵かき	スポーツ（サッカー、現地の遊び等）
	マラリアのビデオ鑑賞	清掃活動
	蚊帳講座	日本文化紹介（日本の概況説明、書道体験、浴衣試着、折り紙等）
	保健関係機関訪問	歯みがき講座
	モシ族王様訪問	ラジオ局の収録
	ラジオ体操	閉会式・参加証授与
Fada N' Gourma 13歳～15歳 (30人) <5日間>	マラリア講座	開会式
	マラリア講話（マラリア体験談）	清掃活動
	マラリアに関するポスター作成および発表	手洗い、含嗽講習
	マラリアの演劇準備および発表	日本食試食
	病院訪問	日本文化紹介（日本の概況説明、書道体験、浴衣試着、折り紙等）
	啓発活動の講義および実践	ラジオ体操
	クイズ大会（主にマラリアに関する質問）	リーダーシップについて講義
		閉会式・参加証授与
Léo 10～15歳 (30人) <4日間>	マラリア講座	開会式
	マラリアの演劇準備および発表	映画鑑賞（日本のアニメ）
	マラリアのビデオ鑑賞	記念植樹
	蚊帳講座	子どもの権利についての講座
	マラリアに関することも含めたお絵かき	スポーツ（二人三脚）
		清掃活動
	日本文化紹介（日本の概況説明、書道体験、浴衣試着、折り紙等）	歯みがき講習
	ラジオ局、テレビ局の収録	ラジオ体操
		閉会式・参加証授与

2010」でマラリア対策を中期目標の一つに掲げ、「マラリア対策戦略計画 (Plan strategique 2006-2010 de lutte contre paludisme au Burkina Faso)」において、2000年の数値をベースラインとしマラリアの罹患率および死亡率を2010年までに50%削減することを目標とした。本プログラムは、特に罹患率の高い地方においてマラリアの予防および予防啓発活動を推進するものであり、JICAから派遣されている青年海外協力隊員によって、現場レベルで市民団体と共に予防啓発活動の推進、展開されている。5歳未満児における死亡の約60%がマラリアである同国の状況を鑑みて、これまで行われてきた啓発活動の一環として、新たに「マラリア予防啓発子どもキャンプ」が企画されるに至った。

本活動では、現在派遣中の青年海外協力隊長期隊員と今回新たに派遣される短期隊員が協働し、同国の地方に位置する対象地域4箇所、開催期間が4～5日間の巡回型の子どもキャンプを開催した。現地の子どもたちが楽しくマラリアに関する知識を学ぶ機会を提供し、さらには子どもたちの親も含めた住民へのマラリア予防啓発活動を展開することを目的として活動が行われた。併せて、情操教育を受ける機会の少ない子どもたちへの教育の場にも含めて、様々なレクリエーションや日本文化紹介などが企画された。この「マラリア予防啓発子どもキャンプ」の具体的内容は、各地域で多少の違いがあるものの、保健行政関係部署への表敬訪問、来賓を伴う開(閉)会式、マラリア講座、蚊帳講座および無償配布、マラリア予防啓発の演劇(患者役を通して疾患の原因から予防、治療に関する内容)、アトリエ(お絵かき)による予防啓発、マラリア教育のビデオ鑑賞、医療機関訪問(見学)、日本文化紹介、(日本の)ラジオ体操、歯磨き講座、スポーツ、記念植樹などであった。なお、詳細については表1に記載した。

Ⅲ. 方 法

1. 調査期間

2009年8月から2009年9月

2. 調査対象者

ブルキナファソ国内でJICA主催の「マラリア予防啓発子どもキャンプ」を開催したHounde、Tenkodogo、Fada N' Gourma、Léoの4地域において同国の

プログラムの実施担当者(ブルキナファソ人)を調査対象とし、このうち本研究への同意が得られ、調査用紙を提出した17名を分析対象者とした。対象者の青少年活動平均経験年数は5.5年(S.D.:2.48)であり、従事している職業は教育関係者が7人と最も多く、次いで指導員(3名)、演劇関係者(2名)という順であった(表2)。

表2 調査対象者の背景

職種	人数(人)
教育関係	7
指導員	3
演劇関係	2
保健関係	1
調整員	1
学生	1
無職	1
未記入(不明)	1
計	17

3. 調査方法

マラリアキャンプ終了後に、対象者の了承を得て質問用紙を用いて調査した。質問用紙には「Comment trouvez-vous ce camps d'enfants avec les volontaires japonaise? Mentionnés ci-dessous les points positifs et les points à améliorer. (今回の日本人ボランティアによるマラリア子どもキャンプはいかがでしたか? よかった点、改善すべき点についてお答えください)」と同国の公用語であるフランス語で教示して、具体的な内容について自由回答を求めた。

4. 分析方法

得られた自由回答から記述内容を抽出し、意味内容の類似性に従い分類したものにサブカテゴリーネームをつけ、さらに各サブカテゴリーは類似性に従って統合し、分類が表す内容をカテゴリーとして命名した。

なお、本分析については、質的研究に精通した研究者にスーパーバイズを受けて、第一筆者が自由記述の回答を分類・整理した。

5. 倫理的配慮

質問用紙の表紙に「Demande de collaboration pour une enquête (調査ご協力のお願ひ)」と題した書面で、本研究の目的及び結果の公表、さらに研究協力は自

由意志によるものであり、個人が特定されないこと、途中で参加を辞退する権利を有することも併せてフランス語にて説明し、質問用紙の提出をもって承諾を得た。

なお、本研究については、筆者が所属する研究機関の倫理審査委員会の承認を得ている。

IV. 結 果

1. ブルキナファソ人スタッフの考えるマラリア予防啓発子どもキャンプの良かった点

記述総数は60件であり、対象者一人より1件から最多で9件の回答が得られた。対象者1人あたりの平均記述数は3.8件(S.D:2.41)であり、具体的な良かった点の内容については「日本文化・日本語を学ぶことができた(10件)」が最も多かった。得られた回答の分析の結果からは、意味内容の類似性から35サブカテゴリーに分類され、さらに以下に示す4カテゴリーに分類された(表3)。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >で示す。

【教育効果】は、<日本文化・日本語を学ぶことができた><マラリアについて理解を深めることがで

表3 ブルキナファソ人スタッフの考えるマラリア予防啓発子どもキャンプの良かった点の分類表
(n=17, 複数回答あり)

カテゴリー	記述数	(%)	サブカテゴリー	記述数	(%)
教育効果	22	(36.7)	日本文化・日本語を学ぶことができた	10	(16.7)
			マラリアについて理解を深めることができた	3	(5.0)
			日本人の活動を見習っていた	3	(5.0)
			子どもが家族の中心となって啓発することができる	2	(3.3)
			子どもの興味を高めた	2	(3.3)
			グループ行動を学ぶことができた	1	(1.7)
			良い生活習慣を習得することができた	1	(1.7)
			体験した内容	22	(36.7)
			現地の関係機関訪問	2	(3.3)
			テーマと時期(雨季)が良かった	2	(3.3)
			蚊帳の配布	2	(3.3)
			日本のアニメーション	1	(1.7)
			全ての啓発活動	1	(1.7)
			開会式などのセレモニー	1	(1.7)
			教育的な関わり	1	(1.7)
			マラリア劇の上演に関して観客がいたこと	1	(1.7)
			植樹	1	(1.7)
			キャンプ中に掲げられたメッセージ	1	(1.7)
			参加証の配布	1	(1.7)
			子ども(参加者)の選択方法	1	(1.7)
			キャンプの活動映像上映会	1	(1.7)
			リーダーシップ講座	1	(1.7)
			子どもとその親を含めたマラリア感染予防プログラム	1	(1.7)
			大きなトラブルがなかったこと	1	(1.7)
協力体制	13	(21.7)	日本人のイニシアチブ	3	(5.0)
			二国間の協力	2	(3.3)
			現地ブルキナ人スタッフとの連携	2	(3.3)
			日本人との共同作業・生活	2	(3.3)
			フランス語でのコミュニケーション	1	(1.7)
			協調性があった	1	(1.7)
			日本人ボランティアの活躍	1	(1.7)
資金調達方法	1	(1.7)			
地域貢献	3	(5.0)	市民を活気づけた	1	(1.7)
			地域活動を活気づけた	1	(1.7)
			子どもたちが地域内で良い仲介役となる	1	(1.7)
				60	(100)

きた><日本人の活動を見習っていた>など7サブ
カテゴリーから構成され、記述数が22件(36.7%)
で最も多かった。

【体験した内容】は、<キャンプ中に行われたプロ
グラムの全て><テーマと時期(雨季)が良かった>
<蚊帳の配布>など17サブカテゴリーから構成さ
れ、記述数が22件(36.7%)で、上記と同様に最
も多かった。

【協力体制】は、<日本人のイニシアチブ><二国
間の協力><現地ブルキナファソ人スタッフとの連
携>など7サブカテゴリーから構成され、記述数が
21件(21.7%)であった。

【地域貢献】は、<市民を活気づけた><地域活動
を活気づけた><子どもたちが地域内で良い仲介役
となる>の3サブカテゴリーで、記述数が3件
(5.0%)であった。

2. ブルキナファソ人スタッフの考えるマラリア予 防啓発子どもキャンプの改善点

記述総数は42件であり、対象者一人より1件か
ら最多で4件の回答が得られた。対象者1人あたり
の平均記述数は2.4件(S.D.:1.11)であり、具体的
な改善点の内容については「キャンプ期間を延長す
る(7件)」が最も多く、次いで「予算・資金の額が
十分ではない(5件)」、「交流が少ない・日本人同士
で固まる(4件)」が多かった。得られた回答の分析
の結果からは、意味内容の類似性から27サブカテ
ゴリーに分類され、さらに以下に示す5カテゴリー
に分類された(表4)。以下、カテゴリーを【 】,
サブカテゴリーを< >で示す。

【体験した内容】は、<キャンプ期間を延長する>
<娯楽的なものでないものにする><規模を拡大す
る>など14サブカテゴリーから構成され、記述数
が20件(47.6%)で最も多かった。

【経済的問題】は、<予算・資金の額が十分ではな

表4 ブルキナファソ人スタッフの考えるマラリア予防啓発子どもキャンプの改善点の分類表

(n=17, 複数回答あり)

カテゴリー	記述数	(%)	サブカテゴリー	記述数	(%)
体験した内容	20	(47.6)	キャンプ期間を延長する	7	(16.7)
			娯楽的なものでないものにする	1	(2.4)
			より理解を促すため現地語(フランス語以外)の配慮	1	(2.4)
			スポーツ活動を延長する	1	(2.4)
			プロジェクターから投影した映像が見えにくい	1	(2.4)
			休憩時間を改善する	1	(2.4)
			参加者の能力に無理のないものを考える	1	(2.4)
			継続的な活動にする	1	(2.4)
			家庭での蚊帳使用につなげる	1	(2.4)
			規模を拡大する	1	(2.4)
			プログラムの変更が多かった	1	(2.4)
			劇の上映方法が良くなかった	1	(2.4)
			ブルキナファソ人が全ての活動に関わるようにする	1	(2.4)
			企画の段階で双方による話し合いがあればよい	1	(2.4)
経済的問題	8	(19.0)	予算・資金の額が十分ではない	5	(11.9)
			資金使途	1	(2.4)
			キャンプ後における現地への資金援助の計画がない	1	(2.4)
			企画者や現地指導員への賃金が少ない	1	(2.4)
日本人参加者の態度・語学力	7	(16.7)	交流が少ない・日本人同士で固まる	4	(9.6)
			日本人も子どもたちと一緒に寝るべき	2	(4.8)
			フランス語能力の向上	1	(2.4)
キャンプの生活上の問題	5	(11.9)	保険による補償を充実させる	2	(4.8)
			薬箱を作る	1	(2.4)
			キャンプ中の外出許可があるとよい	1	(2.4)
			食事内容を改善する	1	(2.4)
キャンプの対象者の選定	2	(4.8)	子どもだけでなく全ての人々を対象にする	1	(2.4)
			子どもの人数を増加する	1	(2.4)
				42	(100)

い><資金使途><キャンプ後における現地への資金援助の計画がない><企画者や現地指導員への賃金が少ない>の4サブカテゴリーから構成され、記述数が8件(19.0%)で二番目に多かった。

【日本人参加者の態度・語学力】は、<交流が少ない・日本人同士で固まる><日本人も子どもたちと一緒に寝るべき><フランス語能力の向上>の3サブカテゴリーから構成され、記述数が7件(16.7%)であった。

【キャンプの生活上の問題】は、<保険による補償を充実させる><キャンプ中の外出許可が欲しい>など4サブカテゴリーから構成され、記述数が5件(11.9%)であった。

【キャンプの対象者の選定】は、<子どもだけでなく全ての人々を対象にする><子どもの人数を増加する>の2サブカテゴリーで、記述数が2件(4.8%)と最も少数であった。

V. 考 察

1. マラリア予防啓発子どもキャンプの効果

本研究においては、ブルキナファソ人スタッフが日本人によって企画された「マラリア予防啓発子どもキャンプ」の効果および課題を質問紙に自由回答する形で調査し検証した。まず、本キャンプの効果として「良かった点」について概観すると、統合されたカテゴリーにおいて、【教育効果】と【体験した内容】のカテゴリーに属する回答が多く、両カテゴリーで全体の7割以上の回答を占めていた。次いで【協力体制】のカテゴリーで全体の2割にあたる回答が挙げられており、【地域貢献】が少数で挙げられていた。以下、各カテゴリーについて考察をしていく。

【教育効果】では、<日本文化・日本語を学ぶことができた(10件)>が最も多く、他にも<日本人の活動を見習っていた(3件)>が挙げられており、これらは普段日本人と接する機会のない現地の子どもたちにとっては、本キャンプが新鮮で興味深い経験となり、加えて子どもたちが従来受けてきた教育・指導とは異なる方法によって学ぶことができたため、様々な体験や学習をすることができたことから有益な機会であったことを示していると考えられる。これらのことは、マラリア予防啓発に関することではないが、子どもたちにとっては、本キャンプをより興味深く、楽しく参加することに効果的であったと

いえよう。一方で、<マラリアについて理解を深めることができた(3件)>が本来であれば最も多くの回答が期待されるころではあったが、マラリア予防啓発に関するプログラムは複数のプログラムにより提供されていたことから、得られた回答にも多様性があり、いくつかのカテゴリーに分散しサブカテゴリーが数種類に分けられたと考えられる。また、少数ではあるが、<子どもが家族の中心となって啓発することができる(2件)>は、子どもたちへの直接的効果だけではなく、子どもたちを通して家族、地域に正しい知識や情報などが伝達され、啓発活動が広く展開されるという目標が達成されていることを意味していると考えられる。同じく、<子どもの興味を高めた(2件)>については、本プログラムの学習内容の習得に効果があったと考えられる。

【体験した内容】は、17サブカテゴリーと最も多くの様々な回答によって成り立っているカテゴリーであり、多面的な視点でその効果が述べられている。まず、<キャンプ中に行われたプログラムの全て(3件)><テーマと時期(雨季)が良かった(2件)><蚊帳の配布(2件)><全ての啓発活動><子どもとその親を含めたマラリア感染予防プログラム>といった回答から、マラリア予防啓発に直接的な効果のあるプログラムであると評価されたと考えられる。また、本キャンプは8月から9月にかけて行われており、この時期は同国の雨季にあたるため蚊の発生が多く、マラリアに罹る危険性が最も高い時期である。時期についての記述数は2件と多くはなかったが、現地の人たちの関心をさらに高めるといった効果があったといえよう。他のマラリア予防啓発に関する回答では、<蚊帳の配布>が2件とそれほど多くの回答が挙げられていなかった。本キャンプでは参加者の子どもたちに長期残効型薬剤浸透蚊帳(Long-lasting insecticide-treated nets: LLITNs)が無償で配布された。LLITNsはマラリア対策で最も効果のあるものとして使用を推奨されており⁷⁾、特に本キャンプが開催された雨季においては主要な予防策であるといわれている⁸⁾。しかし、ブルキナファソ人スタッフの評価はそれほど高くはなかった。今回は、実際にLLITNsが配布された子どもたちに回答を求めたわけではなく、また本キャンプに参加した子どもたちの家庭における所有率も明らかではないなど、LLITNsの配布についての評価は今回の調査では難しいといえる。一方で、<現地の関係機関訪問(2件)><開会式などのセレモニー>

＜マラリア劇の上演に関して観客がいたこと＞＜植樹＞＜キャンプ中に掲げられたメッセージ＞＜参加証の配布＞は、マラリアとは直接的に関連するものではないが、子どもたちにとってはプログラムを遂行するにあたり、強い動機づけになるような効果があったと考えられる。加えて、＜リーダーシップ講座＞や各自が連帯感をもって集団で生活し大きなトラブルがなくキャンプが無事に終わったことから、予防啓発活動の必要性や活動の意味を理解し、今後子どもたちが地域でマラリア予防啓発活動を展開することができることにつながるような効果があったと推測される。マラリアに関することだけを教育・指導するだけでは、子どもたちにとって決して効果的なプログラムではなかったであろうし、少数意見ではあるものの、様々なプログラムの存在が本キャンプでの教育効果を高めたといえよう。

【協力体制】では、＜日本人のイニシアチブ（3件）＞＜二国間の協力（2件）＞＜現地ブルキナファソ人スタッフとの連携（2件）＞など、各対象地域に派遣されている長期隊員が中心となって主導し、現地スタッフとの連携が図られてプログラムが進行されたことが評価されたと考えられる。また、使用する言語を同国の公用語であるフランス語に統一したことで、コミュニケーションがより図られたことも効果の一因であろう。これらの長期隊員によってコーディネートされた共同作業のひとつひとつが、マラリア予防啓発教育の重要な土台となり、短期間のキャンプにおけるプログラムの遂行に大きな効果を与えたという点で非常に重要であったと考えられる。

【地域貢献】は、総数3件で全体の5%に過ぎないが、回答された＜市民を活気づけた＞＜地域活動を活気づけた＞＜子どもたちが地域内で良い仲介役となる＞は、いずれも意義のある内容であり、本キャンプが対象地域にもたらした重要な成果であろう。本キャンプが、わずかながらでも対象地域の活性化への刺激となったと考えられる。

2. マラリア予防啓発子どもキャンプの改善点

本キャンプの「改善点」についてまず概観すると、統合されたカテゴリーにおいて、【体験した内容】のカテゴリーに属する回答が最も多く、全体の半数弱の回答を占めていた。次いで【経済的問題】のカテゴリーで全体の約2割にあたる回答が挙げられており、以下【日本人参加者の態度・語学力】【キャンプの生活上の問題】【キャンプの対象者の選定】という

順で挙げられていた。これから各カテゴリーについて考察をしていく。

【体験した内容】では、＜キャンプ期間を延長する＞が7件と最も多いものの、他のサブカテゴリーについては回答が1件ずつで、計14サブカテゴリーにおよぶ多様な回答からカテゴリーが構成されていた。また、本カテゴリーで改善点全体の47.6%を占め、良かった点よりも全体での割合が高いことから、現地のブルキナファソ人スタッフは、プログラムの改善をより強く感じていることが示唆された。その内容については、まず＜キャンプ期間を延長する＞が7件と最も多かったことから、対象者にとっては子どもたちにとって貴重な体験、教育の場であるからこそ、もっといろいろなプログラムを企画して欲しかったというような思いが背景にあると推測される、一方で、1日のプログラム数が多く、短期間に詰め込みすぎたと感じていることも推測できる。他にも＜参加者の能力に無理のないものを考える＞という回答もあることから、プログラムが対象者にとって過密であったり、困難さを伴うものものあったことがわかった。その背景には、子どもたちの年齢が様々であり、各年齢に応じたプログラムを遂行することが難しかったということが考えられる。次に、＜継続的な活動にする＞＜家庭での蚊帳使用につなげる＞といった内容が改善点として回答されたことは、本キャンプで課題としている点の1つでもあり、且つマラリア予防の重要なポイントである。キャンプが終わった後に適切な予防策が行われることに関する回答はわずか上記の2件ではあったが、このような改善点があるということは重要な意味を示しているといえよう。特に、LLITNsを使用することは、マラリアによる子どもの死亡率を下げることにつながることから⁹⁾、各家庭での使用を推進したいところではあるが、同国の地方では蚊帳の購入費用に関する住民の負担など様々な問題がある⁹⁾。経済面については後述するが、予防活動を継続することやLLITNsの使用など、マラリア予防に効果的と考えられている行動を実践するには、その国々の文化的背景を基に、伝統的な健康教育をも融合することによって、より効果的な公衆衛生の取り組みが高められるといわれている⁹⁾。今後、現地で啓発活動を推進するためには、どのような改善が必要かをさらに検討し、次の活動の際にはプログラムに反映させていく必要があると考えられる。さらに、＜ブルキナファソ人が全ての活動に関われるようにする＞

〈企画の段階で双方による話し合いがあればよい〉との回答もあることから、同国の担当者との検討をさらに重ねていくことが、より現地に根付いた効果的且つ継続される活動につながっていくと考えられる。

【経済的問題】では、〈予算・資金の額が十分ではない(5件)〉〈企画者や現地指導員への賃金が少ない〉といった回答から、本キャンプで準備された金額では十分ではなかったという現状があることがわかった。具体的な収支のバランスについては言及できないため、実際の問題について詳細を明らかにすることはできないが、〈資金使途〉〈キャンプ後における現地への資金援助の計画がない〉といった回答もあることから、キャンプ後の活動の継続費用も含めて資金使途の拡大や増額について今後検討する必要がある。たとえば、本キャンプで推奨したLLITNsについては、参加した子どもに対して1つのみを配布したが、家族全員が使用できるよう購入費用の負担についても検討する必要があると考えられる。また、子どもたちによって発表された予防啓発の劇の上映などを通して、地域住民にマラリア予防に関する知識や情報を周知するための機材の購入や活動資金に当てたりする経済的援助についても、今後検討する必要があると考えられる。

【日本人参加者の態度・語学力】では、〈交流が少ない・日本人同士で固まる(4件)〉が本カテゴリで最も多かった。これは、本キャンプの日本人参加者の多くが短期派遣の隊員であり、まさに異文化の中で、慣れない気候や言語の違いといった環境においては、行動を共にする傾向が強まっていたことから、このような回答が挙がってきたと考えられる。他の〈日本人も子どもたちと一緒に寝るべき(2件)〉〈フランス語能力の向上〉についても、主に短期隊員に対する回答であることから、今後は、短期隊員に対する事前の語学研修や現地の生活に適應することができるような派遣前プログラムを検討する必要があると考えられる。

【キャンプの生活上の問題】では、〈保険による補償を充実させる〉〈薬箱を作る〉の回答からは、キャンプ中に生じた怪我や病気などへの対応策としての提案であると推測される。また、〈キャンプ中の外出許可が欲しい〉〈食事内容を改善する〉という回答についても、本キャンプに対する運営上の課題を指摘しているものであるため、今後検討する余地があると考えられる。

【キャンプの対象者の選定】では、〈子どもだけでなく全ての人々を対象にする〉〈子どもの人数を増加する〉の2件の回答のみではあったが、対象者の視点からは本キャンプをより多くの人に体験して欲しいという思いがあることがわかった。本キャンプでは、マラリアについてその原因から予防、治療など様々な内容で構成されたプログラムを参加者に提供した。たとえば、子どもたちが演じたマラリア予防啓発の劇では、原因から予防、治療といった一連の流れを子どもたちの視点でわかりやすく具体的に説明している。そして、子どもたちが本キャンプで得た知識や情報が、家族に伝達されて、それぞれの家庭における効果的なマラリア予防策の実践につながることを期待している。マラリアに罹患する人たちは、罹患していない人たちに比べて教育水準が低かったり、テレビやラジオといった情報源を有していなかったりといった背景がある¹⁰⁾。つまり、小学校に就学できなければ識字能力も低くマラリア予防の理解度に差がつくであろうし、公共電波さえ聞くことができなければ正しい知識や情報を得ることすらできない。よって、このように知識や情報を直接伝達する機会には、学校に通うことのできないような子どもたちがもっと参加できるように開催周知や募集方法、ならびに対象者の選定方法も含めて検討していく必要がある。また、マラリアの予防が最も必要とされる、妊産婦や5歳未満児も参加できるように、母子参加などの方法も検討することが必要であろう。

VI. 結 論

1. ブルキナファソで企画・実施された「マラリア予防啓発子どもキャンプ」について、現地担当者が考える良かった点とは、【教育効果】と【体験した内容】のカテゴリに属する回答が最も多く、次いで【協力体制】【地域貢献】ということに関するものであった。
2. 改善点については【体験した内容】のカテゴリが最も多く、次いで【経済的問題】【日本人参加者の態度・語学力】【キャンプの生活上の問題】【キャンプの対象者の選定】ということに関するものであった。
3. 今後の活動を考える上では、より現地に根付い

た効果的且つ継続される活動となるように、現地のニーズに合ったプログラムや対象者の選定、さらなる経済的援助等を検討する必要がある。

VII. 本研究の限界と課題

本研究では、調査対象者を本キャンプに携わったブルキナファソ人スタッフとした。低年齢による識字能力の問題や時間等の制約があり困難ではあるが、本キャンプの効果や改善点を明らかにするためには、キャンプの当事者である子どもたちの思いや反応も調査する必要がある。また、日本人スタッフの調査も行うことで、より多角的かつ総合的な評価を得られるであろう。今後は、調査対象者を増やし、今回示唆された改善点を検討した次年度以降の活動の評価も踏まえて、調査を継続して行う必要があると考えられる。

加えて、調査対象者の使用言語が外国語であることから、回答内容の翻訳の際に意味内容を十分に汲み取ることができなかつたことも課題であると考えられる。今後は、調査対象者と共通の言語を用いた面接調査などを通して、回答内容の意味についてさらに深く検討できるような調査法を検討する必要がある。

謝 辞

本研究にご協力頂きましたブルキナファソのマラリア予防啓発子どもキャンプ担当者の皆様、JICAブルキナファソ事務所ならびに青年海外協力隊隊員の皆様に心から感謝申し上げます。

VI. 引用文献

- 1) World Bank: Burkina Faso Data and Statistics, 2008. <http://web.worldbank.org/>
- 2) United Nation Development Program: Human Development Reports. <http://hdr.undp.org/en/statistics>
- 3) United Nations Children's Fund (UNICEF): The state of the world's children 2008. http://www.unicef.or.jp/library/pdf/haku08_0.pdf#search='The state of the world's children 2008'
- 4) 青年海外協力隊 ブルキナファソ医療部会: La Santé Publique au Burkina Faso (ブルキナファソ保健医療マニュアル), 18-21, 2008.
- 5) Barat LM, Palmer N, Basu S, Worrall E, Hanson K,

- Mills A: Do malaria control interventions reach the poor? A view through the equity lens. *American Journal of Tropical Medicine and Hygiene*. 71 (Suppl 2), 174-178, 2004.
- 6) Samuelsen H, Pare Toe L, Baldat T, Skovmand O: Prevention of mosquito nuisance among urban populations in Burkina Faso. *Social Science & Medicine*. 59, 2361-2371, 2004.
- 7) World Health Organization (WHO): World Malaria Report 2008. <http://www.who.int/malaria/publications/atoz/9789241563697/en/index.html>
- 8) Okrah J, Traore C, Pale A, Sommerfeld S, Muller O: Community factors associated with malaria prevention by mosquito nets: an exploratory study in rural Burkina Faso. *Tropical Medicine and International Health*. 7, 240-248, 2002.
- 9) De La Cruz N, Crookston B, Deardend K, Gray B, Ivins N, Alder S, Davis R: Who sleeps under bed-nets in Ghana? A doer/non-doer analysis of malaria prevention behaviors. *Malaria Journal* 5, 61, 2006. doi:10.1186/1475-2875-5-61. <http://www.malariajournal.com/content/5/1/61>
- 10) De La Cruz N, Crookston B, Gray B, Alder S, Davis R, Deardend K: Microfinance against malaria: impact of Freedom from Hunger's malaria education when delivered by rural banks in Ghana. *Transactions of the Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene*. 103, 1229-1236, 2009.